

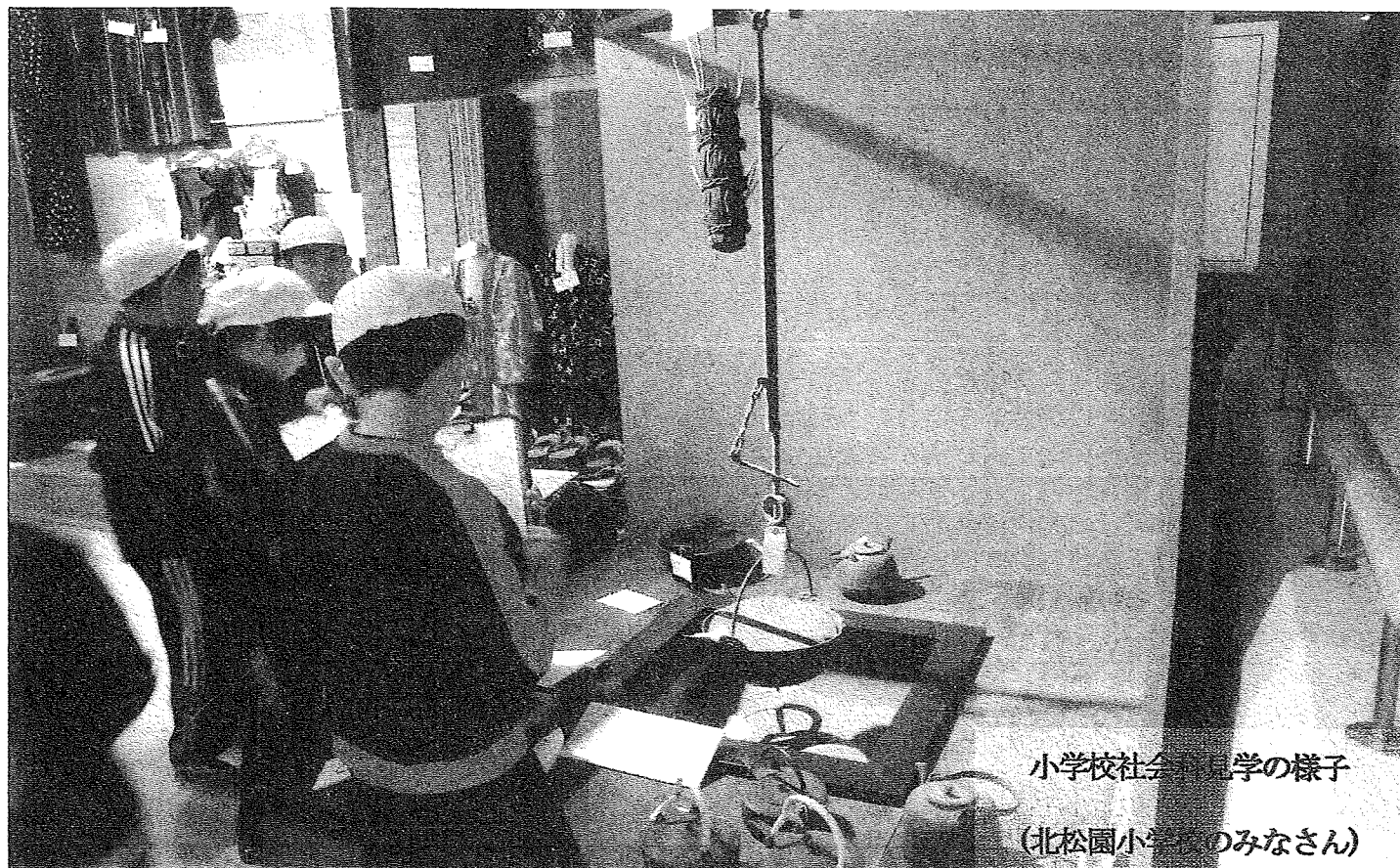
れき じん

となん歴史民だより vol.37

Morioka tonan history and folklore museum

平成25年12月12日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 Tel/Fax 019-638-7228



小学校社会科見学の様子
(北松園小学校のみなさん)

是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

市民参加展に見る盛岡の先人
(その1)

・ 史跡・文化財巡りレポート

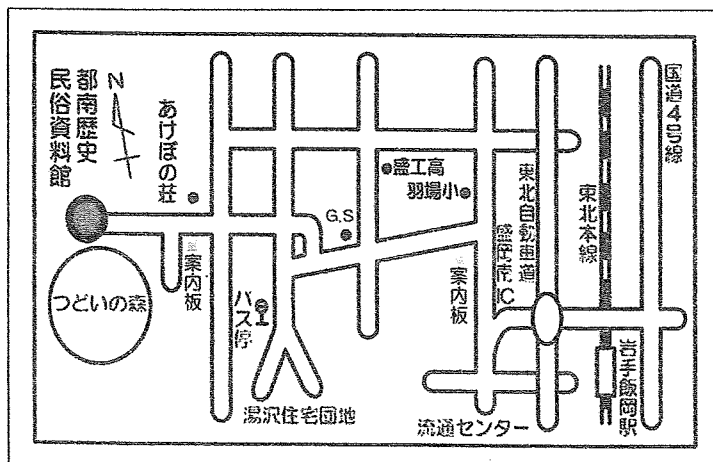
・ 資料は語る⑩

・ 盛岡市所在

指定・登録文化財紹介⑪

・ となんの昔ばなし⑫

MAP☆ACCESS



○利用案内

開館時間 午前9時から
午後4時まで

入館料 無料

休館日 月曜日
(休日に当たるときは、
直近の平日)
年末年始

市民参加展に見る盛岡の先人（その1）

盛岡市都南歴史民俗資料館 館長 玉川 英喜

当資料館では、通常見ることができない貴重な個人所蔵資料の展示公開の場を提供し、それぞれの時代の生活や歴史等に対する理解をより一層深め、興味・関心を高めていただくことをねらいとした市民参加展を平成18年度から開催しています。これまで、郷土の歴史、人々の暮らし・風習、偉人・先人に関わる貴重な資料、あるいは時代を映し出す資料が数多く公開され、さまざまな視点から人々の生活や歴史、郷土を理解する貴重な機会となっています。

今回の「歴民だより」では、そうした市民参加展出展資料の中から、盛岡の先人にかかわる資料を取り上げ、資料をとおして垣間見える先人の人間関係や人間模様などに触れてみたいと思います。今回は今年度「『もりおか』露地裏の珍品・稀書展」の「①宮沢賢治自筆のメモ書きが残された地質図（以下、「自筆地質図）」と作年度「奥羽寺社巡礼展」の「②報恩寺第27世住職喜道泰中書」の2点を取り上げます。資料はいずれも盛岡市在住澤井敬一氏所蔵のものです。

宮沢賢治は、言うまでもなく花巻出身ですが、旧制中学、高等農林時代を盛岡で過ごし、盛岡に大変ゆかりの深い先人で、盛岡市先人記念館にも顕彰されています。当資料館のある赤林山山麓一帯や隣の南昌山は賢治のフィールドワークの場の一つでもありました。そうしたゆかりの地ということで、赤林山山麓にある「つどいの森」には賢治生誕百年を記念した石碑が建てられています。

①の「自筆地質図」は、帝国陸地測量部（現国土地理院）大正5年発行の「花巻」の地図（5万分の1）に、賢治が地質毎に色分けし、岩石の名称などを英語でメモ書きしたものです。賢治の中学・高等農林の同級生で親友の原勝成の家から発見されました。今年になって地図に残されたメモ書きが賢治の筆跡に間違いがないという鑑定結果が得られたものです。

賢治は大正7年関豊太郎教授の研究生となり、同年4月から9月まで、稗貫郡の土性・地質調査に携ります。調査中の5月、賢治は19日付け父への葉書に「(略) 明後日夕刻帰花仕るべく候。明後日にて5万分の1地形図の花巻号は大体調査済みと相成るべく候」(註1)と書いています。また、同11月7日付け関教授の賢治宛書簡に「御問合二万五千分一図着色ノ件ハ今尚ホ早シト存候五万分一図ニテ数回塗試ヲナシ是ト認メタル上二万五千分一図ヲ着色スルヲ順序ト考ヘ候 小生ハ十五日頃御地ヘ赴ク筈ニ付御面会ノ上打合セ可仕候 但シ其前ニ五万分一着色図(花巻図幅)一葉御調製相成度希望仕候 (略)」(註2)とあります。

この「自筆地質図」はこうした調査の過程で作成された、いわば草稿段階の地質図と思われます。賢治と勝成はお互いの調査の進捗状況などについて、葉書等でも遣り取りをしています。想像ですが、「自筆地質図」を挟んで、賢治と勝成は調査時の苦労話などを語り合ったかもしれません。報告書提出後は、親友勝成に不要になった「自筆地質図」を上げたということでしょうか。

また、賢治たちは高等農林2年の時(大正5年7月)に、関教授引率指導のもと盛岡付近の地質調査を行っています。この時賢治はB班で盛岡北西部厨川村、滝沢村方面、勝成はD班で盛岡南西部飯岡村、大田村方面を担当しています。この調査をもとに「盛岡付近地質図」が作られますが、その地質図もこの市民参加展に出展されました。

余談ですが、この時の市民参加展には、国立第一銀行盛岡支店長在任10年、商工業者の指導・育成に並々ならぬ力をそそいだ尾高惇忠が原文司に贈った書も出展されましたが、贈られた原文司は原勝成の曾祖父です。

②の喜道泰中の書は、「盛事相傳千載新」「石上清泉一洗顔(瑞鳩峯道人 八十歳書)」としたためた二幅の掛け軸です。

喜道泰中大和尚は、1814年岩手郡沼宮内に生まれ、竜谷寺住職などを経て、1870年報恩寺第27世住職となり、1898年83歳で遷化されます。俗姓「下村」、通称「泰中さま」と呼ばれて親しまれ、その人徳は多くの人々を魅了しました。泰中老師の姿が見えると、人々は自然と頭を垂れたといわれています。「報恩寺に名僧あり」として、人生や哲学についての教えを乞うため、多くの人々が報恩寺を訪れました。そうした人々の中に、三田商店創業者の三田義正や旧制盛岡中学(現盛岡一高)の名物教師といわれた富田小一郎もいました。

三田義正は、「人間は徳を養え、徳を養えさえすれば必ず報いと云うものが来るものだ」という師の言葉を座右の銘とし、実業家として一時代を築き上げました。また、私立岩手中学(現岩手高校)

の開校や岩手奨学会の設立など人材育成にも大きな功績を残し、さらには弟俊次郎の岩手医専(現岩手医大)の実現・経営を陰で支えるなど、教育界における貢献も多大のものがありません。

また、富田小一郎は泰中老師のもとでの修行を通し、「質素で謙虚、無私無欲」ともいえる小一郎の生き方を形成するうえで大きな影響をうけたと言われています。小一郎は人生観を問われて「わしは何もほしいものはありません。金も誉もいりません。大抵の人は、死にたくないと思っ

ていますが、わしはいつ死んでもよいと思っ

ています。…」と述べ、『慈悲円満に月冴えん此の何時かを求むべき』という書を残しています。この富田小一郎の教え子には鹿島精一、米内光政、金田一京助、野村胡堂、石川啄木、田子一民、郷古潔、板垣征四郎ら錚々(そうそう)たる人々がいます。昭和十四年、東京赤坂で開催された「富田小一郎先生謝恩会」では、時の陸海軍両大臣をはじめ錚々たる教え子たちが集いました。当時の新聞各紙は「日本一幸福な先生」として大々的に取り上げ、富田は一躍時の人となりました。

小一郎は晩年、泰中老師について「八十歳を過ぎた今日までに接し得たどんな方々にもこれ程できた方は無かった。どんなに修養を積まれた方かと頭が自然に下がった」と、語っています。泰中老師のもとで体得された「無私無欲」な生き方が小一郎を通して岩手の偉人・先人に受け継がれていったと言っても過言ではないと思います。

余談ですが、泰中大和尚は報恩寺住職となる前は竜谷寺第15世の住職でした。報恩寺住職となるにあたり、竜谷寺住職は第16世対月和尚に引き継がれますが、その対月和尚の妹カツと一番弟子一偵との間に生まれたのが石川啄木です。

賢治や勝成といい、喜道泰中大和尚と富田小一郎、石川啄木といい、様々な結び付きに、縁の不思議さを感じさせられます。

註1)新校本 宮澤賢治全集第15巻 書簡本文篇 (1995年筑摩書房)より

註2)新校本 宮澤賢治全集第16巻(下) 補遺・資料年譜篇 (2001年筑摩書房)より

史跡・文化財巡りレポート

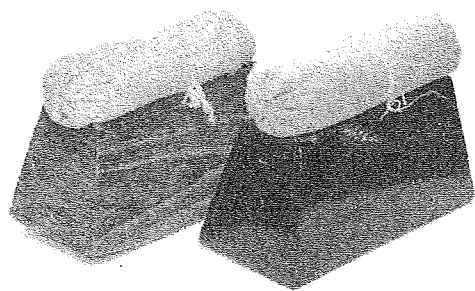
毎年、となん・かけはしの会が主催する史跡・文化財巡りが、今年も10月10日に実地されました。今年、滝沢村埋蔵文化財センター、台太郎遺跡発掘調査箇所及び周辺、徳丹城発掘調査箇所を見学させていただきました。当日は、引率も含めて13名の参加となり、天候にも恵まれた絶好の見学日和となりました。

滝沢村埋蔵文化財センターでは、県指定史跡である湯舟沢環状列石を見学し、同センター内縄文ふれあい館では貴重な土器を見ることができました。次に、市内向中野の台太郎遺跡第80次調査の発掘現場および周辺を見学しました。その後、参加者の皆さんでお昼休憩をとり、午後は徳丹城発掘箇所の見学をしました。

今回の史跡・文化財巡りでは、発掘現場の見学という貴重な体験を通して、身近な遺跡への理解を一層深めることができました。ご協力いただいた見学各所の方々に、この場を借りて御礼申し上げます。来年度も、となん・かけはしの会の皆様とともに、地域の歴史・文化に触れる有意義な機会をつくっていきたいと思います。



【湯舟沢環状列石を見学する参加者】



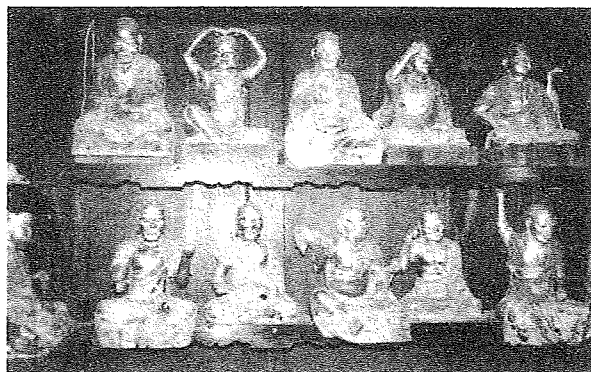
【安土枕】

近代以前、就寝時に使用されていた枕は木製が一般的で、敷布団の外に置かれていました。種類もいくつかあり、箱形をした木枕の上に小豆や綿、そば殻などを布袋に包んだ括枕を乗せたものを安土枕といいます。(写真右)また、箱部分の底が舟底のように丸みを帯びたものを、舟底枕といいます。(写真左)

これらの枕は、鬘を結っている状態でも髪が崩れにくい形となっています。また、舟底枕は寝返りが打ちやすいなど機能性にも優れていました。

このような箱形の枕には、箱部分に引き出しが付いているものも多く、引き出しの中には貴重品や髪飾りなどの小物が入れていました。枕ひとつにも、当時の人々の知恵が詰まっていることが分かります。

参考：岩井宏實監修「日本の生活道具百科②」、「[絵引]民具の事典」



報恩寺の五百羅漢499体 付 標札4枚

報恩寺の羅漢堂に安置されている五百羅漢は檜材で寄木造による彩色像です。県内に存在する五百羅漢の中で最も古い時期のものであり、享保16～19年(1731～1734)に9人の仏師が京都で制作したことが仏像の体内銘から確認できます。

当初500体納められていましたが、現存するのは499体です。中には、伝マルコ・ポーロ像、伝フビライ像といわれる尊像もあり、大陸的な風貌の像もあります。

台座はすべて箱形で、輸送の際に使用したものであると推測されます。

参考・引用資料：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』、2008。

『柄目(からめ)屋敷の桂』 となんの昔ばなし三十七

昔、上飯岡の柄目という屋号の家に生まれた、八の太郎という大男がいました。

ある日、友人と大沢目に薪取りに行き、沢に泳いでいた魚をつかみ取りにして焼いて食べました。欲張って自分ばかり魚を食べていた八の太郎は、のどが渴いたので沢の水を飲むと、いくら飲んでものどの渴きがおさまりません。そのうち、みるみる体が大きく、長くなり大蛇の姿になってしまいました。

自分ばかりが欲張ったからだと後悔した八の太郎は、大蛇の姿では家に帰れないため、代わりに杖を渡すよう友人に頼み、自分は泣きながら箱が森山を越えていきました。

八の太郎は、田沢湖へ行き、主のたつ子姫と夫婦となりましたが、もっと大きい湖に住みたいと思い、十和田湖へ移り住みました。

その頃、市内山岸の永福寺に体が大きく気味の悪い顔をしていた南宗坊という小僧がいたため、和尚が「この鉄の草鞋を履いていきなさい。鼻緒が切れた所が、お前の住処です」と言い旅立たせました。

南宗坊の鼻緒が切れた場所は、十和田湖でした。ここが住処かと思ひ湖水を覗くと、自分が大蛇の姿になっていました。先に住んでいた八の太郎との格闘の末、八の太郎は秋田の八郎潟に移りました。八の太郎の生家では、彼が渡した杖を身代わりとして、屋敷内に逆さに植えて供養しました。杖についた根は大木となったため、邪魔になった枝を切ってみると、血のように赤い脂が出てきました。今では、誰も枝を切ったりはしません。長善寺裏門近くの、こんもりとした林のような木にまつわる話です。